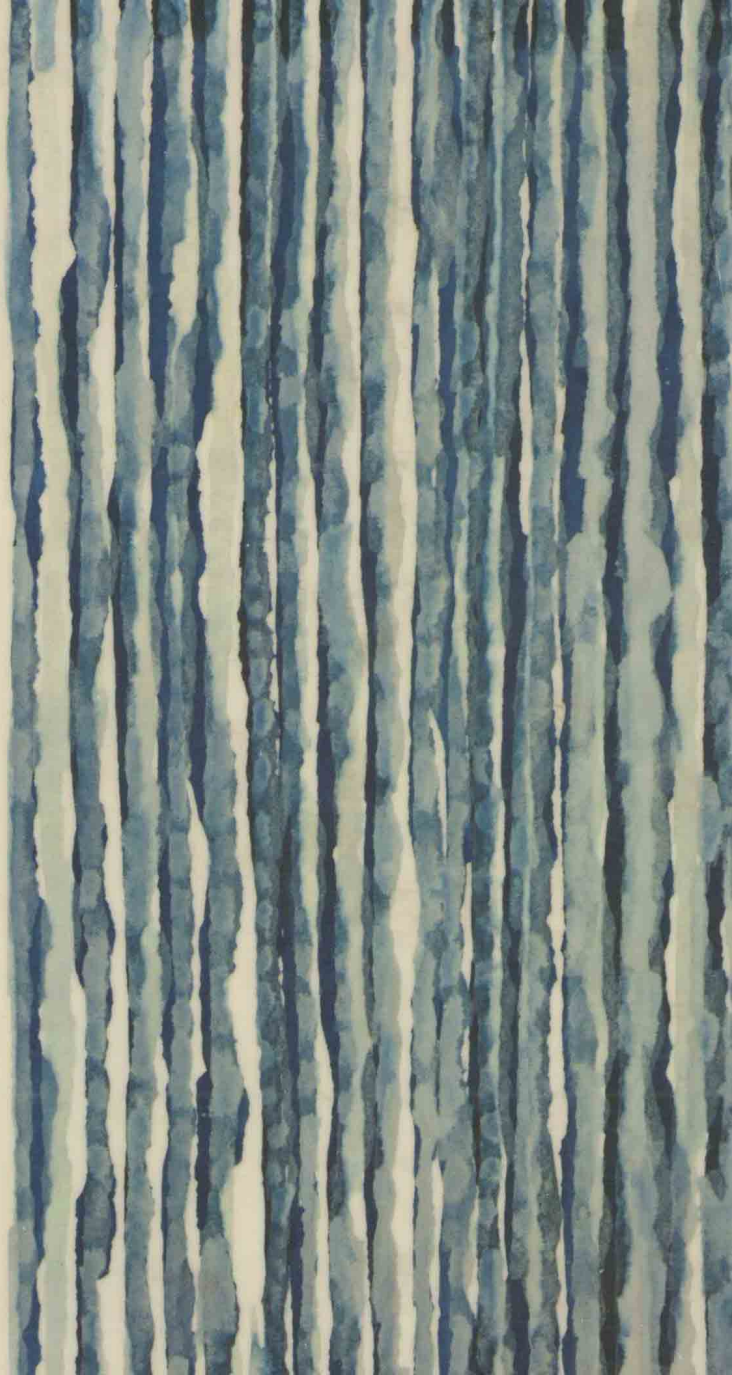
長雨

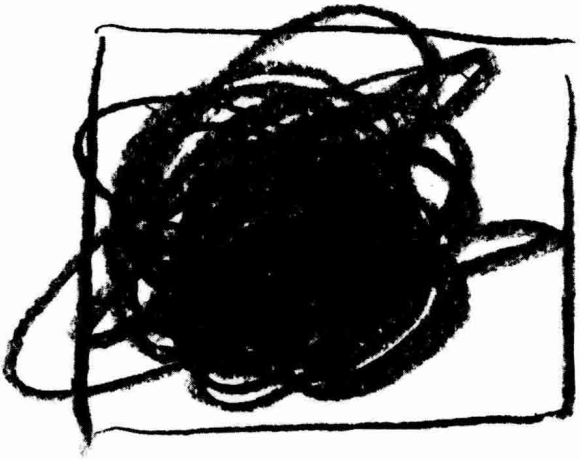
尹興吉

姜舜 訳



長雨

尹興吉



姜舜 訳

東京新聞出版局

著者略歴

一九四二年、全羅北道井邑に生れる。円光大学国文科卒。一九六八年、「韓国日報新春文芸」に、「灰色の冬の季節」が当選、デビューする。著書として『黄昏の家』『九足の靴で居残った男』、『黙示の海』（長篇小説）がある。

長雨

昭和五十四年四月十五日　初版印刷
昭和五十四年四月二十日　初版発行

著者　尹興吉（ユン キル）
訳者　姜舜（カン スン）
発行者　真野義人
発行所　東京新聞出版局
東京都港区港南二ノ三ノ一三
中日新聞東京本社
振替口座（東京）五一五四九七
電話　〇三一四七一一二二一一（代表）
〇三一四七二一四四三四（直通）

印刷・製本　図書印刷株式会社

©1979

目次

長雨　5
羊　79
九足の靴で居残った男　113
直線と曲線　165
青ざめた中年　214
翼または手錠　232
個人と社会の力学——呉生根　262
作家の弁　269
訳者のことば　271

装帧＝李禹焕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

尹興吉作品集　長雨

長雨

1

畑から豌豆の穫り入れをすませたちょうど次の日から、雨は幾日も降りつづいた。雨は粉末のようにさらさらと落ちる小粒となったり、ときには今にも天井を突き抜くほど降りそそぎそうな恐怖の結晶体となったり、折々気紛れをみせながら、暗闇の夜をまるで濡れ雑巾のように水びたしにしていた。

村はずれのどの辺りだろうか。おそらく柩輿(ひつぎこし)を入れておく空家のある土手ちかくだろう。なぜかその辺りだと、犬も狐のように長びく、陰々とした啼き声を十分に出せるようだった。しかし実際には、それよりも遙かに遠いところかもしれない。しばらくの間、小止みになった雨の音のかわりに、犬の遠吠えが合間を埋めていた。それが彼らだけの合図でもあるかのように、戦争のどさくさで何匹も残っていない村の犬どもが、つぎからつぎへと吠えはじめた。その夜に限って、犬どもの騒ぎ方はふつうではなかった。そのときわれわれは、外祖母が寝起きする向かいの居間に集まっていた。外祖母の

心中に何か大きな変化が起きたので、われわれは彼女を慰めて落ち着かせねばならなかったからだ。ところが、母と妹の外叔母は、犬どもが荒々しく吠えだすと、不意に口をつぐんでしまった。互いに外祖母の顔色ばかりをこそこそと窺いながら、防虫網を張りつけてある窓の方、荒い目の網が遮っているのかいないのかわからない暗闇の彼方に、しきりに眼をやっていた。ぶどう蚊なのか、ケラなのか、はっきりしない虫が一匹、さっきから羽根をぶるぶる震わせながら、窓にそって上がったり下がったりしていた。

「おれの言うことが間違いかどうか、みてみるがいい。もう少したったら、みなわかることだ。そうさ、おれの言うことが当ってるか当ってないか、みてみるがいい。」

外祖母が低くつぶやいた。外祖母は、朝飯に混ぜて食べる豌豆の皮をむいていた。一抱えもありそうな、じめじめした豌豆の茎を、ひろげた裳(チマ)の上にかかえて坐り、外祖母は莢をぽきっとむき、別段いそぐ様子もなく、だが手慣れた器用な手つきで中身をひねり出していた。萌黄色の斑点がある細長い実が片方からとび出してくると、それを掌にうけて膝の前においた竹籠にいれ、空になった莢はそのまま、チマのなかへ寄せて落とすのだった。外祖母のつぶやきに、応える機会をのがした母と外叔母は、たがいに言葉に詰まって眼を見合わせた。外ではふたたび雨の音が強まり、それに劣らず犬どもがますます激しく吠えだした。雨音が頂点に達したとき、裏庭の醤油がめ置き場の方でブリキが落ちて転がる音がした。壁にたてかけておいた釣瓶(つるべ)のようだ。戸を揺さぶりながら急に一陣の雨風が吹き込んできて、それでなくても心細く揺れていたランプの灯を、すっかり消してしまった。部屋のなかは、いきなりおし寄せた暗闇とむしむしする空気に包まれて、ぶどう蚊ともケラともつかぬ虫も、羽音をひそめた。三、四軒先きで犬が吠えだした。眠っていた、うちの犬のウォーリーも、そのだら

しない口をひらいて、初めてつぶやくような声で吠えた。荒々しく吠えたてる声が、村の入口からわれわれの住んでいるなかほどの部落に向かって、だんだん近づいてきた。
「灯をつけな」と、外祖母がいった。「おめえ、はよう灯をつけな。暗闇のなかで、外祖母が手さぐりの音をたてた。「なんというひどい天気なんだ、どうにも困ったもんだ」
ぼくは部屋の隅からマッチを探し出し、ランプに灯をつけた。すると母が灯心をあげた。くねくねと油煙がのぼって、天井にまるい紋の影をつくった。
「毎年いまごろになると、天気がくずれるんですよ」と、母が口を差しはさんだ。
「何から何まで、みんな天気のせいなのよ。お母さんがそんなにつまらない心配ばかりするのも、天気のせいよ」
外叔母もひとことといい添えた。田舎のわが家に避難してくる前、母の実家がソウルにあった頃、外叔母はそこから女学校に通っていた。
「ちがうんだ。おめえたちは知らねえでいってるんだ。この年になるまで、一度でもおれの夢がはずれたためしがあったか？」
外祖母はゆっくり首を左右に振った。そのように首を振りながらも、豌豆をむく手は休めなかった。
「わたし、夢なんか絶対に信じませんよ。吉俊（キルジュン）から便りがきたのは、一昨日だったかしら……」
「そうですとも。この頃は戦闘もなく退屈しているって、手紙の最後の方に書いてあるのを、お母さんもたしかごらんになったんじゃありませんか」
「みんな、たわけたこと言うんじゃない。おめえたちの父ちゃんが死んだときだって、おれは三日も前から、もう知っていたんだ。歯じゃなくて、あのときは手の指だったけど、夢のなかで拇指がばさ

りと落ちて跡形もなくなったんだ。」

またしても、その夢の話。

よく倦きもしないものだ。朝の眠りから覚めるとすぐ、外祖母はその夢の話ばかりまくしたてていた。昼飯時がすぎて日の暮れる頃になっても、外祖母は、依然として眠りから覚めきらないように、ぼやっとした状態で、ぶつぶつ独り言をいっていた。歯がほとんど抜けて落ちくぼんだ口許をたえず動かしながら、自分の身辺に何か不吉な兆しがおし寄せていると、くり返し予言するのだった。上下合せて、わずか七本しか残っていない歯だというのに、鉄でできた大きな毛抜きがどこからともなく口のなかにぐいっと入ってきて、いちばん丈夫な歯を一本、音立てて抜き取って逃げる夢をみたというのだ。悪夢から覚め、気をとり直してから、外祖母がまず最初にしたことは、手さぐりで歯をひとつひとつ点検してみることだった。それから、外叔母に鏡を持って来させ、自分の眼でもう一度数を確かめた。それでも気がすまなかったのか、ぼくを顔ちかくへ呼んで、かさねて念をおすのであった。困ったことに、どう覗いてみても、歯は七本そのままであった。まして奥歯の代用として、外祖母がことのほか大事にしていた下側の犬歯は、そっくりその位置に残っていた。だが外祖母は、誰も信じようとはしなかった。犬歯がそのまま残っている事実が、どうしても信じられない様子であった。外祖母の思いはすでに現実をはなれ、夢の方に傾いていて、そこに留まっていた。娘たちも娘婿も信じられなかったし、針の孔にうまく糸を通すので、ときどき誉められていた孫のぼくの視力さえ、いまはもう疑っていた。鏡などもとよりのこと、口の中に直接入れて個数をかぞえた自分の指さえも、ついには信用できなくなったのである。

そんなありさまで、夢の話ばかり喋りながら、外祖母はながい夏の昼日中を過ごしたのだ。ほんと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にやりきれない雰囲気であった。その重苦しさに耐えきれなくて、まず外叔父のことを話し出したのは母であった。不用意にも母の口から、陸軍少尉となり第一線の小隊長として戦場に出ている外叔父の名が、ひょいととび出すと、外祖母は急に落ちくぼんだ両頬に激しい痙攣を起こした。外叔母が、軽はずみな母をたしなめる表情をした。外祖母は母の言葉が聞こえなかったふりをして、そのままやり過ごしてしまった。年寄りを安心させるためには、他に方法がないと考え直したのか、外叔母も間もなく外叔父の話をし始めた。しかし外祖母は、たった一人の伜の名前を、最後まで口にしなかった。それでも夢の話は相変らず続けられた。

日が昏れかかってからは、立場が入れかわり、慰める人と慰められる人の区別がつかなくなった。時間がたつにつれ、外祖母の言葉遣いは、呪術にでもかかったように暗示的になり、どうしたわけか、自信満々な表情すら帯びてきた。それに反して、母と外叔母は訳もなくうろたえて、わざわざ莢をむくために持ってきた豌豆の枝を、ぼんやり見下ろしてばかりいた。結局仕事は外祖母にまかせ、母と外叔母はいらいらして坐り、際限のない外祖母のつぶやきに、耳を傾けていた。

間断なく降りつづける雨が、すべてを濡れ雑巾のように水びたしにしていた。戦争を生き延びた村の犬どもが、一せいに立ち上がり、荒れ狂ったような咆哮を放ち、村を取りまく暗闇のとばりをずたずたに引き裂いていた。外祖母は慣れた手つきで豌豆の莢をむき、豆の実は竹籠に、莢はチマの中に、それぞれ正確に分けて入れた。わが家の怠けもののウォーリーだけが、いつになく荒々しく遅しい声で吠え始めた。その時われわれは、足音を響かせながら隣りの垣根の曲り角をまわってくる人の気配を耳にした。一人だけではなかった。少なくとも二、三人はいるようだ。水溜りにでも誤って踏み込んだのか、泥水をはねる音がし、つづいて、それを天気のせいにする罵声まで、はっきりと聞こえて

きた。いったい誰だろう、この夜中に、どしゃ降りの雨に叩かれながら、村を騒々しく歩きまわるものたちは。戦闘は北の方に退いたとはいえ、まだパルチザンたちが町のなかの警察署を襲撃して火を放つほど、混乱している頃であった。少しでも礼儀をわきまえている人たちなら、よほど緊急な用事がないかぎり、日が落ちてから、他人の家を訪れることは滅多になかったのだ。あの人たちは今、誰の家を尋ねているのだろうか。だいたい何んのために、夜道を群なして歩きまわっているのだろう。母が外叔母の手をいきなり握りしめた。外叔母は母に手をまかせたまま、防虫網でわずかに隔てられている暗闇の彼方を、突き抜くように見つめていた。内部屋の床の下で、ウォーリーが息も切れそうな声で吠えたてていた。少し耳の遠い外祖母でさえ、がやがや騒ぐ人の気配が、わが家の柴戸の前で止まり、ひとしきりためらっているのを、すでに感じ取っていた。

「とうとう来たんだよ。とうとう来やがった。」

外祖母がぼそぼそと乾いた声でつぶやいた。

「順求(スング)」と、柴戸の外で、誰かが父の名を呼んだ。「順求、家にいるかね?」

内部屋で父方の祖母がコンコンと空咳をした。父が外へ出ようとする気配が聞こえた。すると母がびっくりして、内部屋に向かって囁いた。

「わたしがそっと出てみるから、あんたは何もいわずに息を殺していてください。」

しかし父は、部屋の戸をあけ、もう板間に出ていた。履物をさがしてはきながら、今母が言ったのと同じことをいった。われわれは父から、部屋の中でじっとしているように、注意された。父がどこをどうしたのか、狂ったように吠えて暴れていたウォーリーが、細い声を最後に、不意に口をぴたりと閉じてしまった。庭を横切りながら、父が用心深くきいた。

「誰だね？」
「わしだよ。この村の区長だよ。」
「ああ、あんたか。こんな夜更けにどうしたんだ……」
柴戸につるした牛の鈴が、がらんがらんと音をたてた。大人たちのいい合う声がきこえた。それから、外はまた静かになり、降りしきる雨の音だけが耳を満たした。部屋の中をうろうろしていた母は、堪えきれなくなって、戸をがらりと開けた。急いで外へ出てゆく母を、外叔母があたふたと追いかけた。内部屋では、祖母がコンコン空咳をしていた。ぼくのすぐ側で、外祖母が急ぐ気配もなく、豌豆をむく仕事に熱中していた。豌豆の莢を指先で出しながら、外祖母はこうつぶやいた。
「おれは何んともねえよ。今日でなけりゃ明日のうちに、きっと何か便りがくるものと思っているから。おれはさ、何んともねえよ。」
ぼくはいらいらしてきて、おとなしく坐っていられなかった。とうとうぼくは、外祖母ひとりを置き去りにして、こっそり向かいの部屋に行ってみた。外祖母の力ない声が、土間にまで聞こえてきた。
「……おれはさ、何んともねえよ……」
家の中で思っていたより外はずっと暗かった。足を運ぶたびに、生臭いにおいを放つぬるぬるした犬の毛が、両股のあいだにまといついた。ウォーリーがくんくん啼きながら、生ぬるい舌先でぼくの掌をなめた。家のなかで思っていたよりも、雨粒はずっと大きかった。雨はぼくの顔を掩い、麻の半袖を濡らして、たちまちぼくの全身を、水がめに落ちた二十日鼠のようにしてしまった。ウォーリーは、これ以上ついて行けないと観念したのか、まわれ右をしながら、ひどく怯えた声で唸った。大人たちの姿は近くに寄ってみて、やっと薄ぼんやりとみえてきた。既に話はすんだ後らしかった。降り

しきる雨脚のなかで、大人たちはそのまま黙って立っているだけであった。軍用防水帽をあみだにかぶった二人の男と、こちら向きに立っている区長さんの見慣れた顔が、ぼんやり見えてきた。父と外叔母は、今にも地面へへたり込みそうな母を、両方からしっかりと支えていた。しばらく経ってから、区長が口をひらいた。

「家に戻ったら、お母さんによろしく伝えてください。」

すると傍らの防水帽をかぶった男が、その後をつづけて言った。彼はあまり気乗りしない話のようにためらいながら、ひどく羞ているような声で喋った。

「何んと申せばよろしいやら……苦しいのは、わたしらも全くおなじなんです。ひょんなことでこんな役を引き受けちゃって全く……。それじゃわたしらは、これで引き退がらせてもらいます。」

「気をつけてお帰りください。」

と、父がねぎらっていった。

彼らは懐中電灯で道をさぐりながら、柴戸をくぐっていった。母の口から啜り泣きが洩れた。外叔母が母をたしなめた。すると、母はいよいよ大きな声で泣きはじめた。父は黙って先に立ち、家の中へ入っていった。母を支えて歩きながら、外叔母は叱言をいい続けた。

「お願いだから、しっかりしてよ。姉さんがこれじゃ、お母さんはどうなるのよ。お母さんのことを考えなければ、お母さんを……」

母が口を掌でおおった。それで部屋の中へはいる時には、どうやら泣きやむことができた。

先に入った父が外祖母の前に坐り、罪でも犯したかのように神妙な姿勢で、何かをいじくっていた。区長さんが置いていった、濡れた紙切れであった。父は、わざわざ搾りだしでもするように、全身か

らぼとぼとと水滴をしたたらしていた。父ばかりではなく、外から戻ったものは誰もが、体からながれ落ちる雨の滴で、床をぐっしょり濡らしていた。薄着の母と外叔母は、ひとえの上着とチマが体にべったりはりついて、ほとんど脱いだも同然な姿で、肌をあらわにしていた。外祖母は誰も見ようとしなかった。

「それみろ。」といいながら、外祖母はまた独り言をつぶやいた。「それみろ。」

外祖母の挙動を、さっきからぼくは切ない気持で見守っていた。ぼくは、外祖母の絶えずもぐもぐさせている落ちくぼんだ唇よりは、豌豆をむく作業になるたけ関心を集中した。いつからかわからないが、外祖母の手捌きに変化が起きたのに気づいていた。一緒に部屋にいながらそれに気がついたのは、ぼくひとりだけであった。視線を落としたまま仕事に熱中している姿に変りはなかったが、ぼくたちが外から戻ってから、外祖母は痩せこけた両腕を小刻みに震わせていた。そしてわざわざむき出した萌黄色の新鮮な実を、空の莢がたくさんたまったチマの中に気もつかずに落としていた。外祖母がしくじり続けるのをみて、ぼくは気が気ではなかった。できれば手違いを教えてあげようと、ぼくは何度か機会を狙ったのだが、部屋の中の重苦しい雰囲気に気圧されて、とても口を開くことができなかった。乾かして焚口にほうり込む空の莢が、当り前のように竹籠の中へ投げこまれるのを知っていながら、ぼくはただ手をこまねいて、ひどく皺の寄った外祖母の指先を見守るしかなかった。

「おれが何んといってたか、知ってるだろ。今日のうちにも、間違いなく何かの知らせがあるんだと、そういってただろう?」

青白かった顔色が、さっと紅潮し、突然十年も若返ったような外祖母が、二こと、三ことまたつぶやいた。枝についた新しい莢を手早く摘み、中身を捻り出しながら、外祖母は、再び死人のように青

白くなり、その場で今度は一息に十歳も余計に老けてしまった。外祖母はひどく興奮していた。ことばの端々から、隠れていた荒い息遣いがとび出して、喉彦が鳴るほどしばしば乾いた唾を呑みこんだ。興奮の激しさはそのことからも感じとれた。

「おめえたちの父ちゃんが死ぬ間際にも、おれは三、四日も前から知っていたんだ。年寄りは、まんま喰らって、やることがねえから、坐ったまま勝手なことばかしぬかすと、おめえたちはこのおふくろを、馬鹿にしていたんだろうが。けども、今となってみりゃあ、どうだい。おれのことをどう思ってるか、おめえたちの料簡でも、とっくりと一べん聞かせてもらいてえよ。どうだい、今でもおふくろのいうことが、そんなに馬鹿馬鹿しいか？　そうはいわせねえよ。いわせねえとも。眼も耳も遠いからって、おふくろを侮っちゃいけねえよ。婆あだからって、高い飯くらって、訳もなく喋りまくるんだと思ったら、大きな間違いというものだ。今日の今日まで、おれの夢にくい違いのあったためしはないんだ。どんなことが起きたって、おれのみた夢には、たったの一度の狂いもなかったんだ。」

頭を後へそらし、できるだけ高い姿勢を取って坐りながら、外祖母は、自分の先見の明を理解しなかった二人の娘たちを、しばらくの間罵りつづけた。顔がまた真赤になった。娘たちをみつめる充血した二つの眼に漲っているのは、喜悦そのものであった。自分の予感が的中したことを、誰かれなく自慢したくてならない気持がはっきりみえていた。滑稽なほど意気揚々としているその表情をみていると、呪術に近いある強烈な力が胸の奥へ熱く伝わってきて、外祖母という人間が、ぼくには突然怖ろしく感じられてきた。そして、悲劇が襲ってくるたびに、占い師のように奇妙によく当てたという外祖母の主張を、あるがままに信じないわけにはいかなかった。いわばそのとき外祖母は、大きいといえば大きい、小さいといえば小さい一つの闘いで、ついに勝利をおさめたわけだが、それでも足り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c